

女性の社会環境の国際比較に関する研究

2005MM069 杉浦 文香

指導教員：松田 眞一

1 はじめに

本研究のテーマである“社会環境”とは女性の労働環境を表しており、働き方の柔軟性、子育て支援の充実度、ライフスタイルの多様性、男性との均等度、社会制度、経済状況など、女性が働く上で大きな影響を及ぼすものである。就職活動を通して、自分の将来を初めて真剣に考えたのが、本研究のきっかけとなった。世界の女性達がどのような社会環境の中活躍をしているのかが気になり、視野を世界にむけ、今回の研究テーマを決定した。

2 データについて

本研究は web[2] を用いて、女性から見た労働に関する社会環境国際指標割合のデータを使用したものである。分析対象となる国は OECD(経済協力開発機構) 加盟国のうち 1 人当たりの GDP(国内総生産) が 1 万ドル以上の 24 か国とする。

分析内容は、女性が働く上で大きく関わりがある合計特殊出生率、女性労働力率(15-64 歳)、女性労働力率(30-39 歳)、短時間就業者割合(女性)、就業者に占める短時間就業者割合(男性)、家族へのサービスに関する社会保障給付費、教育への公的支出(対 GDP)、男性の賃金を 100 とした時の女性の賃金指数、若年失業率(15-24 歳)、失業率(15-64 歳)、国民 1 人あたりの GDP、第 3 次産業就業者比率から考えるものとする。

3 解析方法の種類と手順

主成分分析、クラスター分析、因子分析、重回帰分析を用いて解析を行った。はじめに主成分分析を行った。その際、労働環境を表す各変数の単位がそれぞれ別であるからデータを基準化した。本研究の主成分分析では、累積寄与率が 80% 以上である第 4 主成分まで解析した。次にクラスター分析を行った。群に分ける時は、デンドログラムを利用し、表示された左から順に 1 群 ~ 5 群として意味付けをした。次に因子分析を行った。本研究の因子分析では、因子数を 4 とした。因子分析では合計特殊出生率についての反応があまりなかったため分析が行えなかった。そのため、最後に重回帰分析によって、合計特殊出生率を目的変数とした解析を行った。

4 主成分分析

主成分分析については、累積寄与率が 80% 以上である第 4 主成分まで行うものとする。

4.1 各主成分の説明

第 1 主成分 (寄与率 41%) 「女性の労働環境によるライフスタイル選択比較の軸」

第 1 主成分は「若者の雇用不安の高さ」、「雇用不安の高さ」がプラスに、「合計特殊出生率」、「女性労働力

率 15-64」がマイナスに働いている。アイスランド、ノルウェー、デンマークなど北欧と、ギリシャ、スペイン、イタリアなどの南欧に分かれている。北欧は、女性労働力率が 24 か国の平均以上であり、1 人当たりの GDP も高く、失業率が低い。他にも、社会制度が整っており転職もしやすい(web[2] 参照)。逆に南欧は労働力率や 1 人当たりの GDP が低く、失業率も高い。合計特殊出生率も減少傾向にある国が集まっている。このことから、女性の働きやすさの違いと、それが社会経済の安定性に繋がることが分かる。また、南欧のグループからは、働きにくさが原因で子どもを産み育てにくくなるというライフスタイルの可能性を狭めてしまう関係があることが分かる。よってこの軸は、女性の労働環境による社会の安定性と、ライフスタイル選択の可能性の軸と言える。

第 2 主成分 (寄与率 19%) 「賃金を中心とした男女間の格差の軸」

第 2 主成分では「経済的豊かさ」がプラスに、「男女の賃金格差の解消度」がマイナスに大きく働いている。大きく反応を示しているのが日本、韓国、ルクセンブルクである。イタリア、ギリシャ、スペインがあまり反応を示していないことから、働く女性は少ないが女性自身が格差を感じるか、感じないかの違いが出ている。韓国では女性の短時間労働者が非常に少なく、また web[1] より韓国、日本は女性の管理職も他国に比べ非常に少なく、女性が働きにくさを感じているといえる。ギリシャやスペインは女性労働力率は日本より低いがこの主成分では日本や韓国とはほぼ真逆に働いている。スウェーデン、スペインに次いで、男女の賃金格差がほぼ解消されているからである。第 2 主成分は賃金を中心とした男女間の格差と言える。

第 3 主成分 (寄与率 12%) 「男女合わせた正規、非正規雇用による労働時間の軸」

第 3 主成分では「女性労働力率 30-39」がプラスに、「女性の短時間就業者割合」がマイナスに働いている。反応が大きいポルトガルは、男女共に短時間就業者割合が少ないことから、長時間働いている正規社員割合が多いと考えられる。逆に反応があるオーストラリア、オランダは、男女共に短時間就業者割合が多く、パートタイム割合も 1、2 番目に多い。北欧があまり反応していないのは、タイムシェア雇用のためだと考えられる。また、女性のパートタイム割合が 1 番多いルクセンブルクは、男性が長時間働いているため男女間の釣り合いがとれ中央に位置している(web[1] 参照)。つまり第 3 軸は社会制度として、男女合わせた非正規雇用の短時間就業者に頼るか、正規雇用の長時間労働者に頼るかの軸と言える。

第 4 主成分 (寄与率 8.6%) 「ルクセンブルク特異性の軸」

第4主成分ではルクセンブルクだけが大きく反応をしている。プラスに「男性の短時間就業者割合の高さ」、マイナスに「経済的豊かさ」が働いている。ルクセンブルクは、男性の短時間就業者割合が1番低いのにに対して女性のほとんどが短時間就業者でパートタイムである (web[1], web[2] 参照)。第3次産業に特化しており、国民1人当たりのGDPがトップである。男女間格差が非常にあるにも関わらず、国全体で見ると社会保障が手厚かったり (web[2] 参照)、失業率が低いことからとても安定していると言える。男女間の分業と言う点で共通している日本や韓国が反応を示さなかったので、第4主成分は、ルクセンブルクはサービス産業を充実させることによって、経済的豊かさを上げた特異性を示す。

5 クラスタ分析

クラスタ分析は、最長距離法を使用した。各群のグループ分けは、図5.1のデンドログラムの左から1群~5群とした。

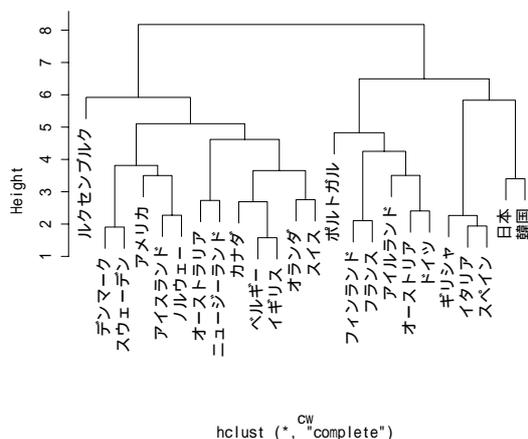


図1 クラスタ分析

5.1 各群の説明

第1群 「第3次産業の影響による経済的豊かさの軸」ルクセンブルク

雇用不安もどの群より低く、国からの給付費も高いため雇用制度は安定している。短時間で働く男性は少ないが、合計特殊出生率は一番高い。サービス産業化に特化しており、その関係で経済的豊かさも高く、潤った経済状況であることが特徴として挙げられる。

第2群 「女性が働きやすい群」デンマーク~スイス

女性の労働力率が高く、男女共に短時間就業者割合が高い。経済的にも豊かで、サービス産業化も進んでいるため、安定した先進国であり、働きやすさを表した群であると言える。

第3群 「平均的な群」ポルトガル~ドイツ

家族サービス給付の高さが高く後は普通であるから、全体的に平均的な国を表した群であると言える。

第4群 「女性が働いていない群」ギリシャ~スペイン
若年、全体共に失業率が高く、女性の労働力率、女性の短時間就業者割合、経済的豊かさ、サービス産業化がワーストであるから、女性があまり働いておらず、労働環境ではあまり活気のない国の群である。男女間の賃金格差解消度は高いが雇用不安も高い群である。

第5群 「女性にとって働きにくい群」日本、韓国

女性労働力率の悪さ、社会制度の悪さが目立つ。また、男女間の賃金格差は際立って広がっていて、全体的に女性の働きにくさを表した群である。

6 まとめ

主成分分析では、女性は男性以上に労働環境によってライフスタイルの選択幅にかなり差が出ることが分かった。他にも第3次産業化と経済的豊かさに大きな関係性があり、基本的には第3次産業の発展と共に、経済も豊かになる傾向があることが分かった。

クラスタ分析では、地形と労働環境の関係も見て取れた。労働環境にはそれぞれの土地にある歴史が大きく関係しているからであろう。

今回ここには載せることが出来なかったが、因子分析では各説明変数の関係性が分かった。女性が働きやすい国は、社会保障が充実していることが分かった。他にも、男女間の格差が少ない国では、女性でも同じように稼ぐことが出来るのだから、仕事を求める人が多くその結果失業者がでてしまう構造になっていることが分かった。女性のことだけ考えれば、男性と同等に働けるのはいいことであるが、視野を広げるとそれが雇用不安の原因になってしまう。他にも第3次産業が短時間就業者で成立している国が多いことが分かった。

重回帰分析では、合計特殊出生率が、男性、女性共に短時間就業者割合に大きく関わりがあることが分かった。

また、資本主義の特徴を考察し、他国と比べた日本の現状は、女性の視点だと、非常に働きにくいということが分かった。

本研究により web[2] の考察では分からなかった、変数同士の因果関係を理解することが出来た。

7 おわりに

本研究で世界に目を向けると、日本の働き方にはもっと柔軟性が必要ではないかと思った。働くことと、生活をしていくことには互いに大きな影響を及ぼす関係性が見えた。自分の働き方と、生活していくことを結びつけて考えていくことが重要だと思う。

参考文献

- [1] 経済社会データランキング：
<http://www.dataranking.com/index.cgi?LG=j>
- [2] 男女共同参画会議、少子化と男女共同参画会議に関する専門調査会：少子化と男女共同参画に関する社会環境の国際比較報告書概要版、
<http://www.gender.go.jp/danjo-kaigi/syosika/houkoku/gaiyouban.pdf>